

接尾辞「ぼい」に潜むカテゴリー化のメカニズム —「女っぽい人」は女ですか?—

尾谷昌則（京都大学大学院）
HZT05753@nifty.ne.jp

0. はじめに

本発表では接尾辞「ぼい」の意味を考察し、その拡張用法に関して認知言語学の視点から動機付けを行う。また、参照点構造（Reference-Point Construction, Langacker(1991,1993)）の観点からこれらの背後に潜むカテゴリー化方略の一側面に光を当てる。以下の(1)は基本的な「ぼい」の用法としてすでに慣習化されて unit status を有するものであり¹、(2)以降は若者言葉風の新規と感じられる表現である。

- (1) 水っぽい、埃っぽい、粉っぽい、飽きっぽい、怒りっぽい、ホレっぽい、忘れっぽい、俗っぽい、理屈っぽい、荒っぽい、湿っぽい、安っぽい、色っぽい、白／赤／青っぽい、大人／子供っぽい、熱っぽい、怒りっぽい、忘れっぽい、
- (2) 元々大学の友人達と作ったサークルが原型になっているため、その名前を踏襲しているのだ。ちょっと大正ロマンの頃の探偵事務所っぽくてよいではないか。
- (3) 「種」の研究が流行らない理由は簡単で「科学っぽく」無いからだ。
- (4) もう終わってるっぽいですよ。 （健康診断に遅刻してきて、遠くから様子を伺っている時）
- (5) もうこれで最後っぽいですね。 （みんなで資料を整理している時）
- (6) あ、もう出来てるっぽいな。 （テレビのCM。新婚夫婦が遠くから建設中のマイホームを見て）

1. メタファーによる動機付け

(7)のような最も典型的と考えられる「ぼい」の意味は「Tが予測している期待値以上にXを多く含んでいる」という物理的な含有量(①)であり、(8)は、このXの部分にメタファーがかかっている例とも解釈できるが、(9)との中間的な用例とも解釈できる。(9)とは、単純に物理的な含有量と解釈できない例である。

- (7) 水っぽいジュース、埃っぽい部屋、粉っぽいカレー
- (8) 色っぽい人（色気がある）、熱っぽい演説（熱意のある）
- (9) 子供っぽい太郎、安っぽい服、俗っぽい名前、荒っぽい運転、白っぽい車、

(9)の場合は物理的な含有量ではなく、「TはXが有する特徴／属性を期待値以上に含んでいる」という属性の含有量(②)と解釈されよう。例えば「子供っぽい」は、「子供を多く含む」のではなく「子供としての特徴を多く含む」であるし、「安っぽい」は「安い品物が持っている特徴を多く含んでいる」となる。²

下の(10)の例も属性の含有量という意味で解釈できなくもないが、(11)は「終わっている」や「出来ている」の属性が何であるのか想像しにくい。

- (10) 探偵事務所っぽい(=2) / 科学っぽくない(=3)
- (11) 終わってるっぽい(=4) / これで最後っぽい(=5) / 出来てるっぽい(=6)

これらの例は、先の属性の含有量からの拡張用法であると思われる。例えば、もし問題の対象Tが「Xの属性を多く含む」ということになれば、それはすなわち「TはXカテゴリーの成員である可能性が高い」と判断されるのは自然の成り行きである。

- (12) **Xの属性を多く含む → Xカテゴリーの成員である**

ゆえに(11)のような例は「Xであると判断（もしくはカテゴライズ）される可能性を多く含んでいる」という判断可能性の含有量(③)ということになる。そして(10)の例は、属性の含有量と判断可能性の含有量の中間に位置するものと考えられる。³

もう1つ問題になるのは、(13)のような「動詞+ぼい」である。この場合、「～する傾向が強い、よく～する」という意味で用いられるが、現在のところは(13)などの例に限られているようである。主に [—agentive]

¹ Langacker(1999)を参照。

² 森田(1977, 1996)は、「ぼい」が付いた場合はマイナスイメージが生じると指摘しているが、これは例えば「安い」が客観的に属性を表現しているだけなのに対して、「安っぽい」の方は「安い品物の特徴を多く含む」という意味であるから、「安いもの」に対して一般的に抱くイメージ（品質が悪い、性能が良くない）がニュアンスとして付加されるからである。

³ ここで注目しておきたいのは、「判断可能性の含有量」の場合には問題の対象Tがどのカテゴリーに属しているか不明であるということである。逆に言えば、Tがどのカテゴリーに属するか分からない時に「ぼい」が用いられると推量用法と解釈されやすい。たとえば(11)のように「Tは終わってるっぽい。」といえ、話者がそう推量したというだけで、本当に終わっているかどうかは分からない。ゆえに、最近の若者言葉では「らしい」よりも無責任な推量として「ぼい」が好んで用いられるようである。（→3節参照）

の動詞が用いられるようである。⁴

(13) 飽きっぽい／忘れっぽい／惚れっぽい／怒りっぽい

このような場合、2通りの解釈が可能である。たとえば「怒りっぽい」の場合は「いつもよく怒る」という頻度の解釈④と、「ちょっとしたことですぐに腹を立てる、また、そういう属性を持っている」という傾向／属性の解釈⑤である。頻度の解釈とは、先に挙げた①（物理的含有量の多さ）と同じで、物質Xの代わりに行為Xの含有量である。すなわち「ある一定期間の中で、立腹するという行為が多く生じる」という意味である。一方、傾向／属性の解釈⑤は、頻度の解釈④に動機付けられている。すなわち、「怒るという出来事が頻繁に生じる」というのであれば、それだけ「怒るという行為が容易に生じやすく、またその人がそのような属性を持っている」ということにつながるからである。ここには **FREQUENCY IS TENDENCY** とでも言うべきメタファーが働いていると考えられる。

(14) 頻繁に怒る → [怒りやすい] という属性を有している

以上、①～⑤に挙げた5つの意味の拡張関係を図示したのが以下である。

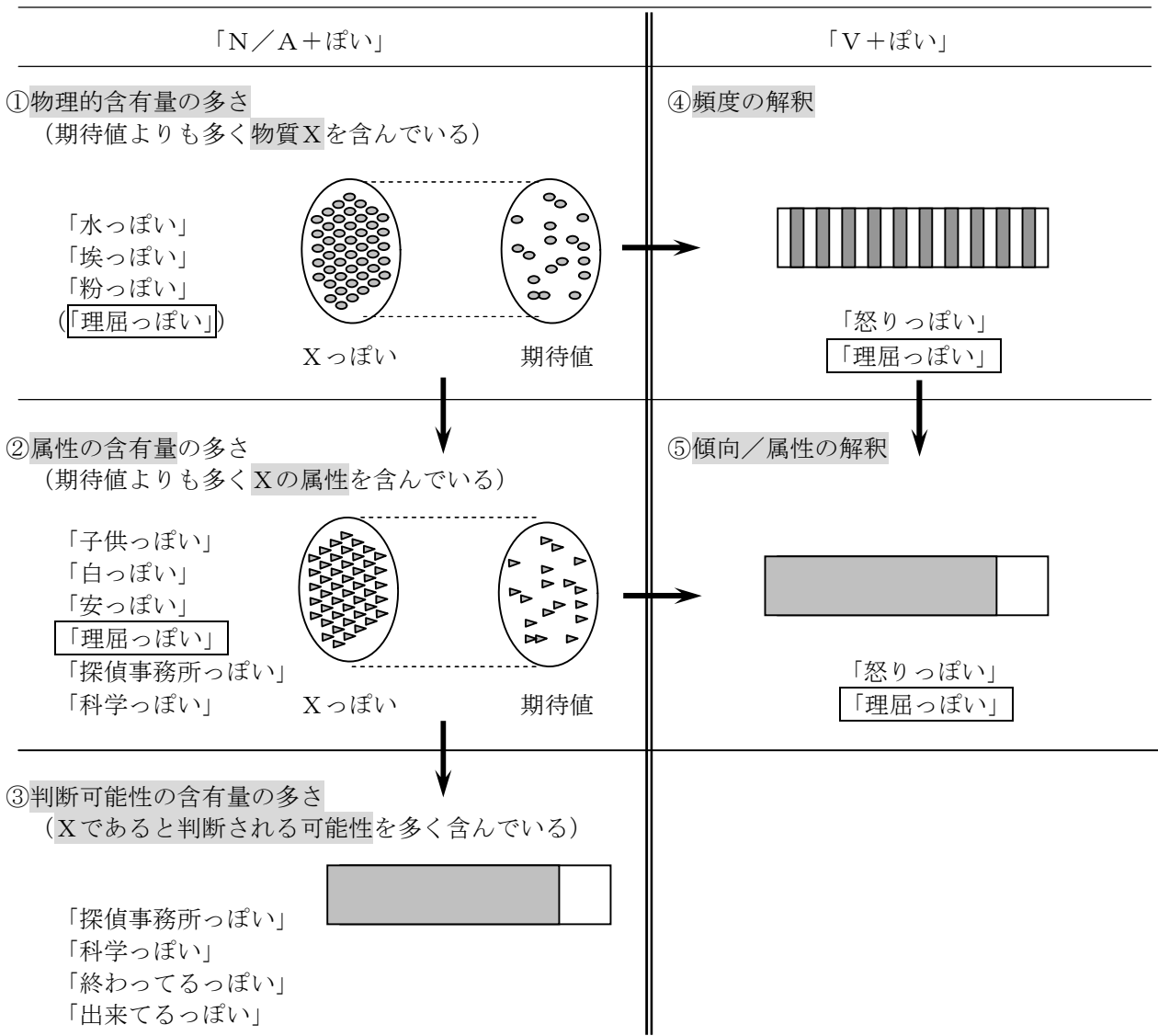


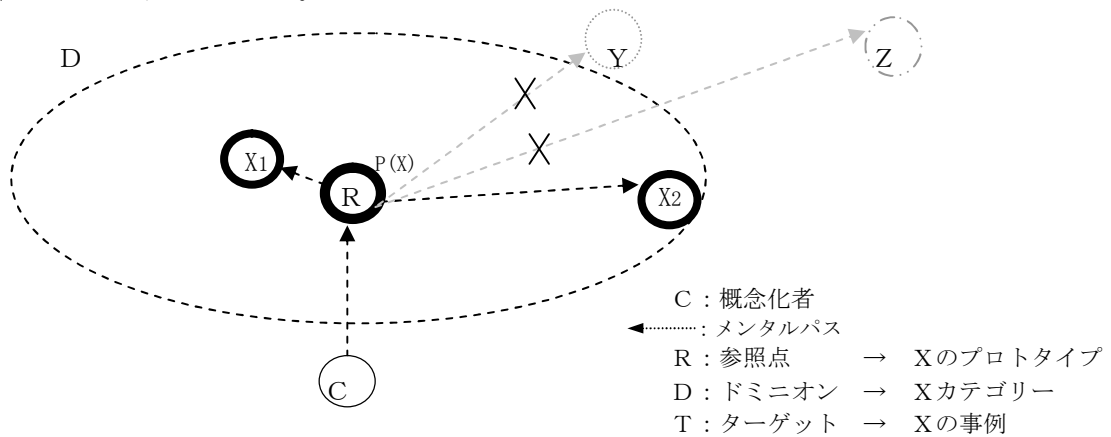
図1 「Xっぽい」のメタファーリンク

2. 参照点構造によるカテゴリー化

Ungerer and Schmid (1996) も指摘するように、プロトタイプはカテゴリー化の際には認知的手掛かりとして、つまり参照点として機能すると考えられる。この考えに基づくと、参照点 (R) はXのプロトタイプ

⁴ 「怒る」には2種類ある。「説教をする」の意味ならば [+agentive] であるが、「立腹する」ならば [-agentive] である。

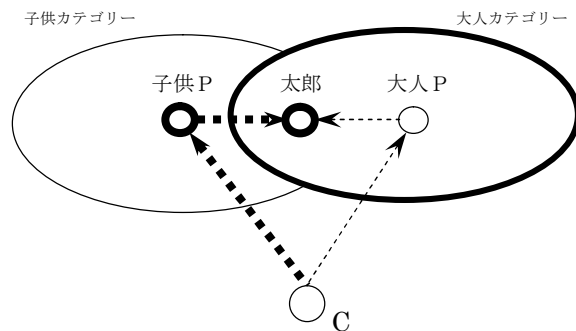
プロトタイプ事例 P(X)に相当し、参照点によって想起される潜在的なターゲットの集合であるドミニオン (D) は、プロトタイプ事例 P(X)によって想起されるカテゴリー成員に相当する。そしてターゲット (T) は、Xカテゴリーの成員であるということになる。



<図2 参照点に基づくカテゴリー化>

絶対的なカテゴリーはその境界線が明確であるため、客観的な条件によって分類することもできるが、ファジーカテゴリーはそうはいかないので顕著なプロトタイプ効果がみられる (Labov 1973)。そこで本稿でも、ファジーカテゴリーから見てゆく。(15)のように、「ぼい」と「らしい」は一見類似した意味を有する。しかし(16)(17)からも分かるように、「XらしいT」という時のTはXカテゴリーの成員であるのに対して、「XっぽいT」といえば、TがXカテゴリーの成員でないことを含意する。⁵

- (15) a. 子供っぽい太郎
b. 子供らしい太郎
- (16) a. 子供っぽい大人
b. *子供らしい大人
- (17) a. *子供っぽい子供
b. 子供らしい子供
- (18) a. もう少し赤らしい色にして下さい。
b. もう少し赤っぽい色にして下さい。



<図3 「子供っぽい太郎」>

上の例(18)においても同様である。(18a)の発話を行う場合は、問題の対象の色は赤であることが前提であるのに対して、(18b)の発話は赤ではない対象に対して注文をつけるものである。以上のように「XっぽいT」の典型的意味は「事例TはXカテゴリーではなくYカテゴリー (非Xカテゴリー) に属しているはずであるのに、Xとしての特徴が顕著に現れている」という意味であり、そこから相対的に「Y性の不足 (Yの非プロトタイプ)」という意味が出てくるものと思われる⁶。これに対し、「XらしいT」といえば「事例TはXカテゴリーの成員であり、且つXとしての特徴が顕著である」という2つを意味する。この2つを1つにまとめると、「TはXのプロトタイプ」という意味になる。以下にそれぞれの意味 (使用条件) をまとめる。

- (19) 「XっぽいT」: [TはYカテゴリーの成員] + [X性の顕著さ] → Y性の不足
- (20) 「XらしいT」: [TはXカテゴリーの成員] + [X性の顕著さ] → Xのプロトタイプ

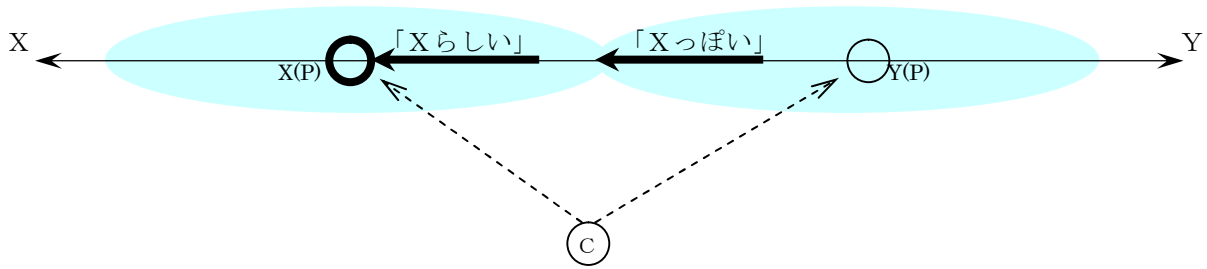
ここでは(19)と(20)で共に [X性の顕著さ] と記したが、厳密にはこれらは当然その意味合いが異なる。このことは、図4のように図示するとよくわかる。「XっぽいT」では問題の事例TがXカテゴリーの成員ではないのに、「XらしいT」におけるTはXカテゴリーの成員であるからである。つまり「XっぽいT」とはYカ

⁵ 子供に対して「子供っぽい」と言えないこともない (下例参照)。ただしこの場合、問題の子供よりもさらに幼い子供のプロトタイプ事例を参照点として使用しているだけである。ゆえに以下のような例文は、中学生や小学生に対しては用いても、保育園児に対しては用いられないであろう。このように参照点となるプロトタイプを相対的に変動させられるのがファジーカテゴリーの特質である。

i. うちの子は本当に子供っぽくて困ってるんですよ。

⁶ 森田 (1977, 1996) も指摘するように、「ぼい」が付くとマイナスイメージになることが多いが、それは上に挙げた2つの意味 (使用条件) に含意されるこの「Y性の不足」という意味特性ゆえである。ただし、推量用法にはそのような意味はない。それは「ぼい」が推量として用いられるのは、問題の事例 (もしくは事態) がどのカテゴリーに属するか不明であるという前提が必要だからである。

テゴリーにあるモノがXカテゴリーへと近づいているという意味である。例としては「水っぽいジュース」が挙げられよう。ところが「XらしいT」では、TはもともとXカテゴリーの成員であるから最初からX性を有していることが前提であり、その上さらに他のXの事例よりも顕著なX性を有している、という意味であり、「らしい」の方がより強いX性（つまりプロトタイプ性）を意味している。



<図4 「Xっぽい」と「Xらしい」のスキーマ (その1) >

3. 「っぽい」の推量用法

(19)(20)のような意味で「っぽい」と「らしい」が用いられるのは、問題の事例TがXとYのどのカテゴリーに属しているかが発話者に分かっている場合であり、どのカテゴリーに属するか分からない場合は共に「推量」の意味になる。たとえば(21)(22)の場合、どちらの道が正しいのか分かっているわけではなく、(19)(20)でそれぞれ2つ挙げた条件のうち「どのカテゴリーに属しているか」という条件が背景化されて、共に「X性の顕著さ」だけがプロファイルされるため、1節の(12)や注3でも示したように「X性の顕著さ」はすなわち「Xカテゴリーの成員である可能性が高い」という推量用法へとつながる。

(21) 「どっちの道だと思う？」 — 「右っぽいね。」

(22) 「どっちの道だと思う？」 — 「右らしいね。」

これらが推量の意味になるもう1つの理由は、この場合の「左/右」がファジーカテゴリーでないからである。ファジーカテゴリーの場合はプロトタイプが想起され、そのプロトタイプに近いか遠いかという認識が成される（典型事例用法）。しかし(21)(22)における「左/右」は2つに1つの絶対的対立なので、プロトタイプが想起しにくく、ゆえにどちらのカテゴリーに属するのか？という推量用法になってしまう。

(23) 「TはXっぽい」「TはXらしい」が推量の意味になりやすい時

(I) 事例TがXカテゴリーに属するかどうか不明な時

(II) Xがファジーカテゴリーでない時

ただし、同じ「推量」と一言にいても当然ながら「っぽい」と「らしい」ではニュアンスが異なる。「右らしいね」の場合は自分の主観的な判断というよりは何かしら客観的な手掛かりに基づく判断というニュアンスがあるのに対して、「右っぽいね」の場合はその場で知覚した情報に基づく甚だ状況依存的で感覚的な判断である。このことは、「っぽい」の典型用法である「水っぽい」「埃っぽい」「粉っぽい」「湿っぽい」「荒っぽい」などが全て感覚・知覚的なものであることから分かる。

このように、同じ推量を表すにしてもニュアンスの違いがあるのだが、これはそれぞれの原義に由来する。「らしい」の場合は、広辞苑（第四版 onCD-ROM）によると、形容詞を作る接尾辞の用法は平安時代まで行われた推量の助動詞「らし」に由来するという。現代語においても助動詞「らしい」は、伝聞推量（もしくは他に根拠のある推量）を表すものであり、これが basic meaning（基本意味）と思われる。ところが「っぽい」の場合は、basic meaning は「水っぽい」「湿っぽい」などの感覚知覚的な認知に基づく表現であり、この形容詞を作る接尾辞から「右っぽいね。」や「もう終わってるっぽいね。」などの推量の助動詞へと拡張しつつある。以上のことから、両者共に形容詞を作る接尾辞と推量の助動詞という同じ2つの用法を持ちながら、その意味の拡張関係が全く逆になっていることが分かる。

(24) 「っぽい」 : 顕著なX性 → Xである可能性が高い

(形容詞を作る接尾辞)

(ex. 「水っぽい」)

(推量の助動詞)

(ex. 「もう終わってるっぽい」)

(25) 「らしい」 : Xである可能性が高い → 顕著なX性 (Xの典型事例)

(推量の助動詞)

(ex. 「右らしい」)

(形容詞を作る接尾辞)

(ex. 「男らしい」)

「っぽい」に関しては、推量用法 (ex.(6)(7)(8)) の方が現代人の直感からも新規な表現であると感じることから、(23)のような拡張の順序になっていることは疑いない。「らしい」に関しては、以前は使用範囲が広がったものが、現代ではかなり意味が限定されてしまったようである。推量の助動詞であればTがどのカテゴリーに属するか不明でも使用できるのに対して、典型事例を表す形容詞をつくる接尾辞として用いられるとき

は、TがXカテゴリーの成員であるという場合のみしか用いられない。その中間段階にあると考えられるのが(26)の例であろう。この場合は、典型的な骨董がないという意味（典型事例用法）でも、骨董品である可能性のある品物がない（推量用法）という場合でもどちらでも使用できる⁷。(27)では、本当に不安かどうか不明なので推量用法なのだが、現代語では明らかに「不安そうな」という表現の方が好まれるであろう。最後に(28)(29)の例では、子供ではないと分かっている者に対して「子供らしい」を使っているのであるから推量用法とは言えない。現代語ではあきらかに「子供っぽい」という表現の方が好まれるであろう。

- (26) あの店の様子を見ても分るじゃありませんか。骨董らしいものは一つも並んでいやしない。(芥川龍之介「門」: 198)
- (27) 姥竹は不安らしい顔をしながら附いて行った。(森鷗外「山椒太夫・高瀬舟」: 266)
- (28) 若い人々には、兼々その名を聞いて想像していた文学者や雑誌記者がこうした子供らしい真似をしようとは思ひも懸けなかった。(田山花袋『田舎教師』: 166)
- (29) 私と行きたくない口実だか何だか、私にはその時の先生が、如何にも子供らしくて変に思われた。(夏目漱石『こころ』: 32)

4. 女っぽい人？ 女らしい人？

最後に特殊なカテゴリーについて見てみよう。たとえば「男／女」などはファジーカテゴリーではないので、(23)に示したように推量用法になりやすいはずである。しかし「男／女」のプロトタイプを想起しようと思えば出来なくもない。このように、絶対的対立をなすカテゴリーであるにもかかわらずプロトタイプが想起しやすい場合は、典型事例用法／推量用法のどちらにもなる。ただし(30)(31)のように、問題の対象Tが男であるか女であるか分かっている場合は、推量用法の出る幕はない(→(23))。以下の例では、装定構造(30)でも、述定構造である(31)でも、どちらも推量とは解釈しにくい。⁸

- (30) a. 女っぽい IZAMU
b. ?女らしい IZAMU
- (31) a. IZAMU は女っぽい。
b. ?IZAMU は女らしい。

(30a,31a)の場合、IZAMU は女ではないのだから、「子供っぽい」と同じ「っぽい」の意味である。つまり本来は男であるのに、女としての属性が顕著であるという意味である。ところが(30b,31b)は、問題の対象が男であるにもかかわらず「女らしい」が用いられている。これは(32)のように暗に IZAMU を女カテゴリーの周辺事例と比較して「それよりは女のプロトタイプに近い」と意味しているものと思われる。

- (32) IZAMU は、下手な女よりはよっぽど {女っぽい/?女らしい}。
(33) オカマは、下手な女よりもよっぽど {?女っぽい/女らしい}。
(34) 「ひえ～、女っぽい……」 (女性に対して、TVアニメ「マクロス」より)

ただし同じ男に対してであっても、(32)と(33)ではニュアンスの違うが、これは「っぽい」の basic meaning に帰結される。「っぽい」は感覚・知覚的な認知に基づいているので、「女っぽい」という場合も外見的な印象に左右されやすく、「らしい」の方は内面的なもの（性格など）に基づく認知を反映する。

以上の例は、問題の対象T (IZAMU, オカマ) が男女のどちらに属するかが話者に分かっている場合であったが、これが不明な場合は推量用法の可能性も出てくる。男女の区別に中立な「人」などの場合である。⁹

- (35) a. 女っぽい人
b. 女らしい人
- (36) a. あそこを歩いている人は女っぽい
b. あそこを歩いている人は女らしい。

装定表現の(35)は、推量用法よりも典型用法の方が好まれるようであるが、推量用法が全く不可能なわけではない。ところが述定表現の(36)では推量用法の可能性が大きくなる。これはそれぞれの構文的意味 (constructional meaning) に由来するものと思われる。

さて、ここまで来ると本発表の副題に付けた問いに対する答えが分かる。すなわち「女っぽい人」とは、どちらの可能性もあるということになる(^^;) 問題の人が男女のどちらに属するか不明な場合には、(19)に挙げた条件の1つが背景化されるわけであるから、もう片方の【X性の顕著さ】だけが際立つことになり、そ

⁷ ただし、「骨董品」はファジーカテゴリーであるので、前者の典型事例用法の方が好ましいと思われる。そしてファジーカテゴリーでない対象Tについて述べるときは、プロトタイプが想起しにくいので、(22)のように推量用法になる。

⁸ 勿論、IZAMU がどんな人か分からない場合には推量用法として理解されることは可能である。

⁹ ただし、中立の「人」を用いている場合でも、コンテキストによってはどちらに属するか了解済みで用いている場合もあるので、必ずどちらかの用法に限定されるというわけではない。

の人が女かどうかまでは言及できない。この時、「女としての属性が顕著である」ということはすなわち「その人は女かもしれない」という推論から推量用法になりやすいが、どちらにしても女かどうかは不明である。一方、何の前提知識もない状態で「女っぽい人」と聞いた時も同様で、その人には女としての属性が見受けられ、女である可能性が高いと感じられるが、その人が本当に女かどうかは不明のままということになる。

5. おわりに

本発表では「らしい」との比較を通じて「っぽい」の意味を論じてきた。「Xっぽい」の基本的意味は、「本来属するはずのYカテゴリーの典型事例から離れて、Xのカテゴリーに近づいている」という意味であり、それが図1に示したように様々に拡張されていると主張した。特に最近の若者言葉では③のような「判断可能性の含有量の多さ」まで拡張が進んでおり、推量としての用法が確立されつつあることを指摘した。これは元来（伝聞）推量を表す「らしい」とは拡張の順番こそ全く逆であるが、両者は非常によく似た意味を有している。さらには、形容詞としての「Xっぽい」に見られる認知様式に関しては、参照点構造に基づく記述可能性を示した。しかし認知文法（Cognitive Grammar）に基づく Langacker (1991:43) の研究では、形容詞を *trajector* と *landmark* に基づいてスケール上の基準点以上をみたすものと記述をしているが、本発表で取り上げた「っぽい」は2つのカテゴリーにまたがる相対的な認知に基づくものである。ゆえに本研究は、形容詞に反映される認知様式が Langacker の記述するように単純に「基準値以上」と記述するわけにはいかないことを示唆するものである。これは今後の認知文法における形容詞研究の課題である。

Appendix (小説やWEB上で見つけた「っぽい」の用例)

- 「要するに、その冷めた性格変えなさいってことでしょ。変えて生徒に手え出して、男の子産んであげればあ？」ミサトは笑いながら、いやみっぽくいう。
- 「ふっ・・・無知な娘だ」ヨハンがキザっぽく、だけど引きつった顔で答える。
- 幌のパジャロという選択が渋い。一見優男っぽいのが、アウトドアスポーツもやるんだらうか。
- 豆粒みたいな乳首は少女っぽくていいけど、摘んだり噛んだりした時に物足りないかも....。
- LAOX の computer 館に入るとさすがに客で混みあっていた。いくつもあるレジの前には長い行列ができていた。オタクっぽい匂いを発する異様な目つき の男たちが...(中略)...待っている。
- ...数十人の氏子と、彼らをとりにくく見物客でごったがえし、混沌とした猥雑な活気がみなぎっていた。地熱が発散するような、むんむんする土っぽい熱気があふれかえっている。(円つぶら『祇園祭殺人事件』)
- 「あんな憐れっぽい事を御言いだがね、あれでもとは随分酷かったんだよ」(夏目漱石『こころ』)
- 普段の加奈子ならば、いかにも悪役の、悪役っぽいせりふね、だからあなたは2流だ.....
- 「ダメだね。草花のたぐいは、かれんで、かわいすぎる。少女趣味っぽくて、願いさげだ。」(円つぶら『太陽よ、素肌に愛を』)
- 料理が次々と出てくる。マコカレイはきれいな薄いピンク色だ。縁側っぽいところも入っている。
- そして、【私 (ZERO)、高西君→沢渡美紀】である。上の二組と違い、好意のベクトルが男側から出ていた組み合わせだ。しかも、三角関係っぽい。
- 手帳の表紙に落書きっぽく手書きでシャネルのマークを書いている。
- よくある入門書っぽい本には「まず、最初にガスがあって、.....」とか書いてあるが.....

参考文献

- Labov, William 1973. "The Boundaries of Words and Their Meaning." In Charles-James N. Bailey and Roger W. Shuy, (eds.), *New ways of analyzing variation in English*. Washington D. C. : Georgetown University Press, 340-73.
- Ungerer, Friedrich and Hans-Jorg Schmid 1996. *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Longman.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics*. Vol.4, No.1, 1-38.
- Langacker, Ronald W. 1999. "A Dynamic Usage-Based Model." *Grammar and Conceptualization*., 91-145. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 森田良行 1977.『基礎日本語—意味と使い方』東京：角川書店
- 森田良行 1996.『意味分析の方法—理論と実践—』東京：ひつじ書房